

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25年 6月 7日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23790693

研究課題名（和文）ソーシャル・キャピタルが抑うつに及ぼす影響に関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical research on the association between social capital and depression

研究代表者

濱野 強 (HAMANO TSUYOSHI)

島根大学・プロジェクト研究推進機構・講師

研究者番号：80410257

研究成果の概要（和文）：

本研究では、ソーシャル・キャピタルと抑うつ状態の関係性について、他変数との相互作用の中で明らかにすることを目的とした。その結果、ソーシャル・キャピタルの認識が良好であり、かつ、社会的サポートを有する場合において、抑うつ状態の確率が最も低下することが認められた。また、社会的サポートのみでは、抑うつ状態の低下に対し十分に結びつかないことを鑑みると、地域の特徴であるソーシャル・キャピタルと個人の状況を反映する社会的サポートの両者を踏まえた予防活動が必要であることが示唆された。今後は、本知見について、縦断研究に基づく検討が望まれる。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to examine the synergistic effect of social capital, measured by trust, and social support on depression. As a result, social capital-depression associations vary according to an individual's social support. These results extend previous discussions about the importance of developing individually-centered prevention strategies with new perspectives focused on improving contextual characteristics, such as social capital. Further longitudinal research is needed to confirm these findings and to explore the mechanism underlying these associations in this settings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学・健康科学

キーワード：疫学, ソーシャル・キャピタル

1. 研究開始当初の背景

(1) ソーシャル・キャピタルと健康

1990年代以降、疫学（epidemiology）研究によって検証が進められてきた個人要因に加えて、社会構造要因と健康状態の関係に着目した社会疫学（social epidemiology）研究への関心の高まりが示されていた。こうした社会疫学研究の進展は、欧米諸国の研究者を中心として、こころの健康に関する諸問題の中でも抑うつ予防に関する新たな理論化と方法論の確立へと発展するとともに、より

実践的な議論としてソーシャル・キャピタルと抑うつ状態の関連性の探求という学術的潮流を提起した。

そして、研究開始当初の背景として主要な論点（現状と課題）としては、以下に関して合意が得られていた。

(2) ソーシャル・キャピタルと抑うつ状態の関連性の探求（現状）

従来、抑うつ状態との関連が示されてきた収入、教育歴や就業等の個人要因に加えて、

地域に固有の住民間の信頼関係や相互扶助を意味するソーシャル・キャピタルが私たちの健康状態と関連していることが欧米諸国で行われた先行研究により明らかにされてきた。ソーシャル・キャピタルとは、政治学や社会学等の領域で提唱された理論であり、2000年頃を契機としてハーバード大学の研究者らが健康状態や死亡率に及ぼす影響を明らかにして以降、実証的研究に基づく議論が進展してきた。

そうした中でこころの健康状態の一指標として、抑うつ状態とソーシャル・キャピタルの関係も定量的な知見に基づき議論が示されてきた。

(2) ソーシャル・キャピタルと抑うつの関連性の探求 (課題)

先行研究では、ソーシャル・キャピタルが抑うつ状態に及ぼす影響について検討がなされてきた。しかしながら、そのメカニズムは、未だ明確になっておらず、また必ずしもソーシャル・キャピタルと抑うつ状態との間に関係性が認められない可能性も指摘されていた。

以上の現状を踏まえて、当該課題における最も重要な論点としては、他変数との関係性の検討に基づき抑うつ予防におけるソーシャル・キャピタルの意義を明らかにすることであった。

2. 研究の目的

以上の現状と課題を踏まえて本研究では、ソーシャル・キャピタルと抑うつ状態の関係について他変数との相互作用の中で明らかにすることを目的とした(図1)。

具体的には、社会的サポートとの関係性を踏まえてソーシャル・キャピタルが抑うつ状態に及ぼす影響を明らかにすることで、現状の公衆衛生活動のブレイクスルーを喚起しうる地域を基盤とした“個人と個人を取り巻く社会的な要因に基づく重層的なこころの健康対策”の意義と有用性について提起することを目指すこととした。

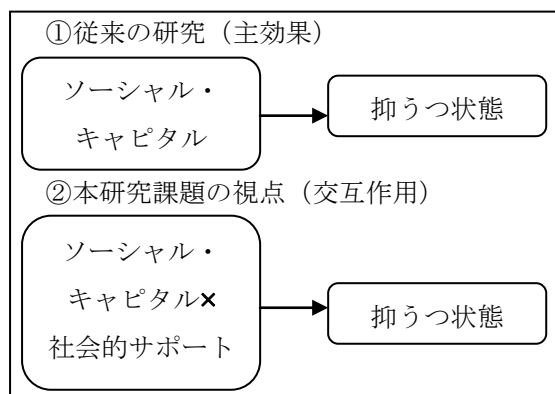


図1 研究の枠組み

3. 研究の方法

本研究では、質問紙によるアンケート調査によって、ソーシャル・キャピタル、社会的サポートの有無、抑うつ状態、及び個人属性(性別、年齢)、個人特性(最終学歴、日常生活における暮らし向き等)について把握を行った。

そして、データ解析には、SPSSを用いるとともに、データベースの構築には、地理情報システムを活用した。

4. 研究成果

(1) 主な研究成果

本研究結果より、ソーシャル・キャピタルの認識が良好である場合(地域住民がお互いに信頼できる関係性にあると認識している)は、良好でない場合に比べて、抑うつ状態を感じている者の確率が低いことが認められた。さらには、社会的サポートの有無を踏まえて両者の関係性について検討を行った。その結果、ソーシャル・キャピタルの認識が良好であり、かつ、社会的サポートを有する場合において、最も抑うつ状態の確率が低下することが認められた。また、社会的サポートのみでは、抑うつ状態の低下に十分に結びつかないことを鑑みると、地域固有の特徴であるソーシャル・キャピタルと個人の状況を反映する社会的サポートの両者を踏まえた予防活動が有用であることが示唆された。

(2) 研究成果の意義

近年、我が国においては、こころの健康問題を抱える者の増大、それに伴う医療費増大や労働力の不足等の社会的損失が危惧されている。そうした中でこころの健康問題に関しては、個人特性に焦点を当てたアプローチが主に指摘されてきたが、未だこころの健康問題を抱える者は年々増加の一途をたどっている。

こうしたこころの健康問題を取り巻く環境において、本研究結果はブレイクスルーを喚起すると考える。つまり、個人特性に焦点を当てた場合には、健康的なライフスタイルへの改善やその獲得を個人々人に対して促すアプローチが用いられている。しかしながら、こうしたアプローチを明確に、かつ効果ある形で実行するためには、個人を取り巻く(個人が属している)環境改善も同時に必要であると考えられる。

したがって、本研究が論じた地域の要因の一つであるソーシャル・キャピタルに着目することを通して、従来のこころの健康づくり対策が直面している環境面への配慮という課題を解決しうる新たな視座を含めることが可能となり、次世代のこころの健康対策の一助になることが期待できる。したがって、今後は、得られた研究成果を基盤として、地

域での介入研究によりその成果を評価することでより頑強なエビデンスを提起することができる。

(3) ソーシャル・キャピタルと抑うつ状態：メカニズムの議論に関する考察

本研究課題では、ソーシャル・キャピタルが抑うつ状態に及ぼす影響に関して、以下の仮説を設定した。具体的には、「ソーシャル・キャピタルが人々のストレス反応を軽減し、抑うつ状態（感）の上昇を抑える」と仮定した。この仮説を検討するため、抑うつ状態との検討に加え、血圧との関係についても検討を行った。

その結果、ソーシャル・キャピタルの認識が良好である場合（地域住民がお互いに信頼できる関係性にあると認識している）は、良好でない場合に比べて収縮期血圧が低いことが認められた。

以上の結果より、人々が互いに顔の見える関係性を構築している場合では、ストレス反応が軽減され、抑うつ状態や血圧の低下につながる可能性が認められた。今後は、両者の知見を踏まえて、ストレスの程度に基づくソーシャル・キャピタルの効用についても整理を行うことで、本研究成果の更なる発展が考えられた。

(4) 地域・環境要因と健康に関する研究への示唆：今後の発展性

地域・環境（residential environment）要因について先行研究では、社会的環境（social environment）と物理的環境（physical environment）の2つの視座より議論が進められている。そうした中で本研究課題では、社会的環境要因の一つとしてソーシャル・キャピタルに注目した検討を行った。

加えて本研究課題では、物理的環境要因に対しても考察を加えるべく、居住地の特性を代替する物理的環境変数（＝どのような場所に住んでいるかを示す）と健康状態との関係について地理情報システムを活用した検討を試行した。その結果、居住地（都市部、山間部等の場所）や居住地周辺の各種社会資源（医療機関、運動施設等の個人の健康を増進する施設、及びパブやバー、ファーストフード店等の健康行動を阻害する施設）が健康状態に対して影響を及ぼす可能性が示唆された。

以上の知見を踏まえると、ソーシャル・キャピタルに加えて、これらの物理的環境についても分析モデルに含めることで地域・環境要因が及ぼす影響がより明確になることが考えられた。したがって、今後は、本知見で得られた関係性を基盤としながら、他の地域・環境変数が抑うつ状態に及ぼす影響を考

慮し、予防活動においてどのような実践が有用であるかという議論が強く望まれる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① Hamano T, Kawakami N, Li X, Sundquist K, Neighbourhood resources and stroke: a follow-up study in Sweden, PLoS ONE, 査読有, 8(2), 2013, e56680
- ② 濱野強, 塩飽邦憲, ソーシャル・キャピタルと健康政策, 健康福祉政策情報, 査読無, No. 61. 2013, PP. 1-2
- ③ Hamano T, Kimura Y, Takeda M, Yamasaki M, Isomura M, Nabika T, Shiwaku K, Effect of environmental and lifestyle factors on hypertension: Shimane COHRE Study, PLoS ONE 7(11), 査読有, 2012, e49122
- ④ Hamano T, Kimura Y, Takeda M, Yamasaki M, Nabika T, Shiwaku K, Is location associated with high risk of hypertension? Shimane COHRE Study, Am J Hypertens 25, 査読有, 2012, PP. 784-788
- ⑤ Hamano T, Fujisawa Y, Yamasaki M, Ito K, Nabika T, Shiwaku K, Contributions of social context to blood pressure: findings from a multilevel analysis of social capital and systolic blood pressure, Am J Hypertens 24, 査読有, 2011, PP. 643-646

〔学会発表〕（計4件）

- ① Kimura Y, Hamano T, Takeda M, Yamasaki M, Shiwaku K, Place and people: what can we learn from the evidence?, 第61回農村医学会学術総会, 2012年11月2日, 島根県民会館（松江市）
- ② 濱野強, 並河徹, 地理情報システムを活用した居住環境と高血圧症に関する検証: Shimane COHRE Study, 第35回日本高血圧学会総会, 2012年9月20日, ウェスティンナゴヤキャッスル（名古屋市）
- ③ 濱野強, 並河徹, 社会環境要因は血圧に影響を及ぼすのか: Shimane COHRE Study. 第34回日本高血圧学会総会, 2011年10月21日, 栃木県総合文化センター（宇都宮市）
- ④ 濱野強, 藤澤由和, ソーシャル・キャピタルと健康政策, 日本計画行政学会第34回全国大会, 2011年9月11日, 中央大学後楽園キャンパス（東京都）

[その他]

ホームページ等

島根大学疾病予知予防プロジェクトセンター
<https://www.cohre.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱野 強 (HAMANO TSUYOSHI)

島根大学・プロジェクト研究推進機構・講師

研究者番号：80410257